

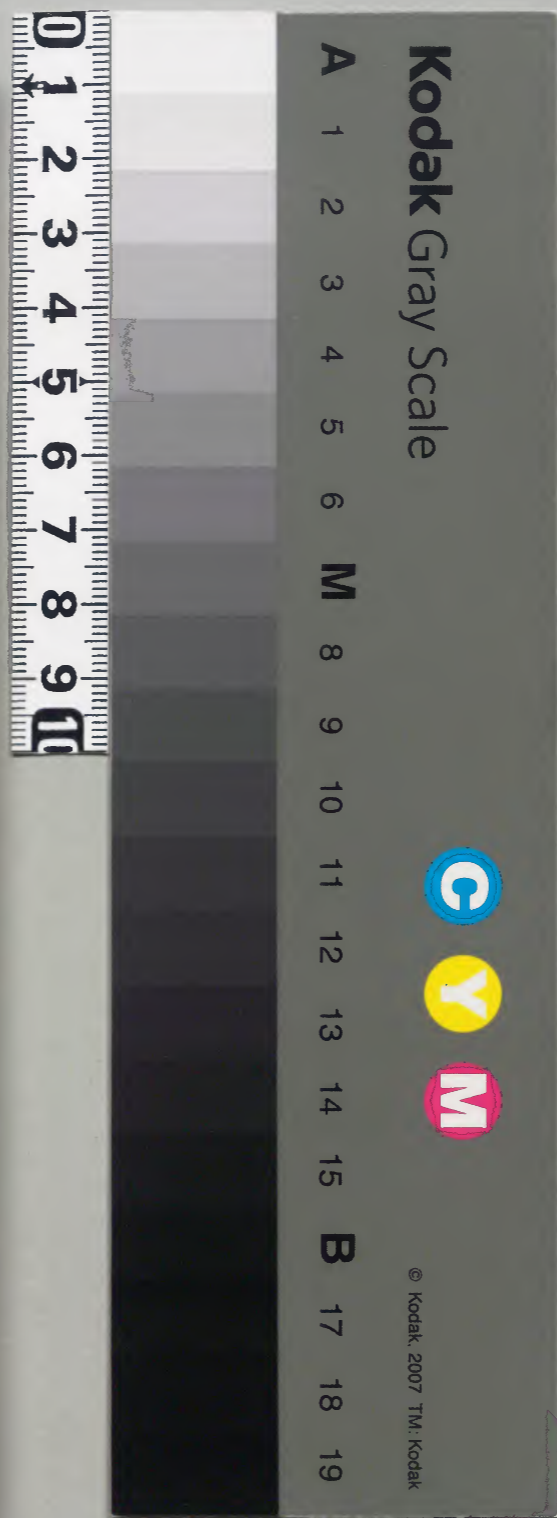
逸史譯本

三

和書門			
二	八	一〇	類
冊	架	函	

庫文閣内		和書
一五〇	二八四〇	
函	冊	類
九	二	
架	冊	

内閣文庫	
番號	和 28410
冊數	12 (3)
函號	150 35



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

竹山逸史卷之三

目録

一 毛利元就卒去の事

元龜二年

一 信長叡山焼うちの事

同

一 内裏修造の事

同

一 三形の原合戦の事

同三年

一 武田信玄卒去の事

天正元年

一 將軍義昭位をくろく事

同

事

一 朝倉浅井両家没落の事

同



一長宗部元親土佐をとり
事 同

一信長長駕を討平らけり
事 同二年

一長篠合戦の事
事 同三年

一信長近江よりうつり
事 同四年

事

一信長内大臣を拜せり
事 同

事

一羽柴秀吉播磨を領す
事 同五年

事

一織田内大臣左大臣を遷
事 同五年

事

竹山逸史卷之三

向陽佐々木復甫 譯

元龜二年辛未より天正
五年までをさす

元龜二年辛未正月 大君從五位上侍從に任せらるる
初信長伊勢に切つらるる時 神戶藏人盛友と中直
甲して子息織田三七信孝を養子に何れに
友年始の礼として美濃のゆきしを信長に盛友兼て
叛逆のきりし有とひいかけて日野よりを押し下
攻む城主小笠原長忠かくちをとりし取て之を西

③二月信玄軍を起し来り三月は遠州の高天神を

攻む城主小笠原長忠かくちをとりし取て之を西

三河の諸所の砦をおひやくし駿河の海賊数百人遠州
掛塚の乱に入り本多忠勝打平らけり信玄方の大将
秋山晴近伯耆東三河に入り四月境内の悪者をも甲
州方の一味して乱をかこし人数を集め同濟を
おこし大君青山喜太夫義門をおそひ平らけり
義門を討死せし大君吉田の陣かりて甲州の勢を
そとへおひ別は一直の軍兵をかて山縣昌景をお走
せむししより信玄も迫る来りし時を滞陣せり
翌月に至て飯國せり江五月浅井長政大阪本願寺
と志し合て諸所の一向門徒をそめて近江の鎌

羽を攻しむ秀吉横山より軍兵をひそめて鎌羽を
至り命を賜ふ戦あてお破るぬ是より織田と浅井の
中まゝ破るにき美濃の住人竹中半三郎重治と云
人あり信長その智慮多き人なる事を知て秀吉
のまにけらば軍師とせらるは時半三郎は三才
よいちりて秀吉にまき人と思ひて万事談合するに
半三郎は又はむ心くくしりけり以後秀吉
功をたみて織田家随一の人となるなり
すけがらるるに伊勢の一向門徒乱をかこして長島を
まきりて要害よきを頼みしして是より

一年余りかり信長五万の軍兵を引て長島にて合
戦ありし島子盗賊を討つて舟路より陸路よ
りし島子盗賊を討つて舟路より陸路よ
氏卒去せらるる七十五才 嫡孫輝元世を治す

天皇 詔有て後三位を 贈官しむ毛利氏ハ大量有
て節義をおもん 勇ましく力はよく吉田の三百
貫より起て山陽山陰十國を併せかたもら 和歌此傳入
かりし家の集世に流布はくもさう以前尼子勝久
毛利氏の病をすて伯耆を拵入り諸城を攻るその臣
山中麿之介幸盛ハ出雲の末石より立入りて近郷をか

を欠取し病死の事をきくより勢ひひびくさう
んから吉川元春かくとびくよりいってや盗賊を討つ
にして亡父の尊霊をさぐさめ奉る人 追善供養を
るより生切徳ゆきめりうまきとんとて即日一万の軍
兵を引てあそみ戦ひ末吉を攻んとして先づ伯耆に
入て勝久戦おそんとつひやせしうハ康之介せ
んさちかくて降系に出うえ春まひしうハさう
置しう幸盛ハ作病して雪隠より逃て美作に
出奔しぬ元春はさう新山をせむ城中の者さう
ちうくふかして勝久ハ隠岐に出奔しはひし京都

己身をかくしぬを余降系せぬ者し皆逃て出雲伯耆等
とくく平きぬ元春みはら富田の城をおさめたる
鹿之介伯耆をゆきて盗賊のかしらとなりしうら
くしき事なきておとし又京都に身をかくしけり

③七月信長使者を遣はして信玄度々貴國にお
かす条うけおぼさるおぼしめ姉川合戦のこころ加勢
の降儀も今よははるは福と某し諸軍の合戦もいと
おろくて御加勢も及んばはるのりやけちるそん
降ふとさうれた然使者をさしとんとて又使者の
内意を以て濱松の城に甲州よりのはきりりよきて

危し固寄よりはら玉ひて甲州の矢さきをよけ玉ふ
へしとそいそせしける大君かししけるおよりし降
答有て何ともて左右の人をこてさるをせ玉ひ信長何事
いふやうんこもしし濱松をよきてさるあつハ刀を折
て向後武士道いたてますしさを信玄の矢さ記何めか
そる事やあるとおんせりり④八月信長近江の浅井
を余吾を焼く九月新村小川をとる三日に
金太をとる最初甲斐信玄五歳内よ攻めりしん
と企ておそる足利義昭よとるしを結ひ朝倉義
井并い叡山の悪僧等と一味して信長を亡さんとす

信長此由を起すべく、叡山僧をにくし回し、
進て叡山をせえらる筋を出して此度の一戦はせむ
延暦寺をつひして一人もいふまじき事なれども
抑ふ比叡山延暦寺とヤリ昔 延暦の帝今も京よ
御近都のこより王城の鬼門鎮護の為には創造はら
し大伽藍るれハ信長の諸将今度の合戦よしなき
るものと先ずめ若かりし信長ちつとも懐せられ
天子の為に官軍をおこしして乱臣を平つけ凡そく
しけつう雨に髪を洗つて一足の暇をしろしきりし
ころ朝倉浅井の叛逆せしよこれ叡山に退くもの

たまハ坊主ともかじんせし一糸國法もそむくのはみ
我一人のてきよあはれ其上やもはるに要害をいめ
きて 天子をしかりしことまつる今よそし
めは今にささまハ永く天下のうねいりふんとして
山の四方より追より悉火をかけて伽藍を焚き
坊主のふらぎ捕へてくさむ置ら女こそいはいませ切て
して山中よりちう一つあぐりし事あり叡山領の田地ハ明智
光秀み玉より城を坂本よき洗せそかいらぬこと(遠)
十二月 大君甲州勢又よせくくるを起こし(石山)土台田み
市出陣なり廿八日信玄二連木よお入る本多忠勝夜

まじりきく信玄の陣屋を打破る廿九日信玄吉田に
迫りしう兼て用意ありと知て引退く(京)今歳内
裏造堂成就を信玄供席の田を置んとおもひしう
朝歌ものうもいともはらうかざしとて浴中の町
家子金をうしし付その利息を内裏ふなむるも年中の
席儀式ふとく先例よしと一流浪の公家衆止
職よりつういぬふも先年席内 勅有し席り
けとるきこし

元龜三年壬申正月 大君駿河へ入りしう信玄越后の
謙信う大君の席身方とまりて始ておそとぬ(濃)信長

緒谷をぢむいしう浅井長政出合をけいし上洛者し
よ掛津の歌く多く降来し出る(甲)謙信信濃へ入
て長治の火をひらり(乙)大君より加勢のいぬ
武田勝頼八百の軍兵を引て謙信をむらふ謙信
ハ勝頼の勇氣をほ然とくをひして引う(丙)伊豫
の園司西園寺殿軍を出して土佐の一條兼家卿を
攻らる兼家卿はくいを豊後よりとてしうハ大友
宗麟ハ大をさといもひし伊豫をとらんといふ
たてし四月ハ豊後の勢伊豫をうらしうハ西園寺
公廣卿おそとて軍をひき中直うして宗麟を

数ヶ月滞留し諸城をさとして降参ささるるもの
元伊豫半圍におつる則引て飯る(江)七月信長緒谷を
攻め教度の合戦を打破てり此ハ濱井ハ朝倉に加勢を
乞ふ越前の勢大撞み陣取て緒谷をさくをんと
八月將軍義昭織田朝倉の内とて軍を止めさせ
ら(参)十月信玄北國雪深くて謙信ハ軍をいさるる
叶ふつとあり國中の軍勢のさ引て飯る
三河遠江をうちさくんとハ建良飯田をおし
備井見付より引て陣取ら大君内藤三左門信定
作てて敵のやうを伺もし然らる信定見付の原

并出る処を信玄下知して追取りさく大君本多忠勝ハ
大久保忠世ハ河邊をくしと信定はけ色ハ二人馳けて敵の多
勢をわけて入身方を下知して戦ていひきりていひき
一口板をひきしとき敵さくし追迫りぬ本多平
八太夫ハ廿五歳黒糸の鎧ハ唐の首打ハ曹をさて
唐首ハ龍鱗ハシヤクマの類外國よりさる物ハ長き毛の曹よりぬつたり下る
物ハ六のときせよめつしし三河の武者十人より七八人曹をつるしし
蜻蛉切とり鎧を右手の腹にかいしつて長身ハ柄大く二丈あり
りろ多青貝をさつて
こどもほのあまてしちちち
切たまはかく名付ししつと引下て二反をさるり押さるる
敵味方の真中ハ馬をさるるあやせたり忠勝ハつら
い敵味方の目をかとりさるる見付けの人家ハ火を

うけて濱松よおそかつるけき大君よりおそせむい平
八なつてせし市方の勢ハ生て御らの一人ハ河の浦し
と作らむしかあきの方よりし尺付の坂子札をえて
「家康よおきたるものう二つありからのけしらよ本
多平八」とそかきけけり
信玄う近習杉右近助
うきりしかくて
信玄ハ武田左馬助信豊穴山伊豆守信良して遠州をせ
終させ二股馬場民部少捕氏勝後美濃守足輕四千人添て
濱松よ備しむ大君よ信玄ハ二股をせむいむとて
市馬を出されし甲州の勢ハ陣をりしものいし
う引うしむてき天龍河ハ筏をりして二股城より

水汲む道をあらしうハ二股の城はいよおちぬ東三河の
辺鄙おなくハ叛き多しせし信玄ハ一味を菅沼定及盈のし
固く野田の城を守てあしうし信玄又山縣昌景秋山晴
近して市領内ヨ打入しむ大君加勢を信長よいむお
十月信長作間信盛瀧川一益平手甚左三門汎秀を加勢よ
はうして信玄ハ兵法の達人かうりり来て戦をい
むもしかあきまりつて出合むるといせむしり
大君その謀を用いて一月うほとと出合むをうしり
十二月甲斐の勢三万五千人三形原ヨ陣取て濱松の外部
をやきおそしり大君今もてむをい出んとし

玉ふを作間信盛所袂とせしめて信玄を敵を一つと
とま人の中より通す出合玉をぬきてく座しんと
かせし大君いやとよ先ぬ信玄北条をせしむる小田原
志大の門口すてつりつるを北條出合さししが今も
玉て人のさし草とるなり今敵の城下よりあしきた
るを忍て矢一すらし射つけし侍のいしれや
己通今日合戦せぬほとならの墨の衣さぬを人の
とかりい付る所氣色ろろを市家人等し何ゆはと
ひて所川とめし廿二日信玄井谷の陣を引んと
子息勝頼馬場氏勝山縣昌景何とを押して引退く所方

の軍兵見物と出て石を投ぐるりて敵よりと投りし所方
れ人の面白きるゆふありてこれしと城を出て石を
ける事数百人におよびてまはさすとゆりりれし所方
ゆくと追つけしはきて大君は美濃の勢しはし城を
出て三形原の陣よりむし氏勝昌景本陣の人をせし
城中の者謀こころおちて追つけしめ早くゆり
をかきせしといひかくる上原能登小山田兵衛昌行
向ひ遠州の陣の人数をくちし尾張の加勢の旗色み
とめ今日合戦かつり必定しとゆり昌行きて信
玄はつけたまは信玄室賀甚五郎行俊してるを

ろ果してあうをいよとやせよそ人数引くして陣
を直ししきり市方はいはる八千人を九百にけむい
鳥井四郎右門忠廣をめぐりててまのやうをいせらる
忠廣飯て敵さるる多勢も七日の戦あつるべし
中あくるを大君市比り者て汝日比の剛氣よあけらる
今日何とて憶病よりいよと作けし忠廣おそ
そ剛憶いせんせらるる軍の勝負は君のさるる
所あつると中上る依て又渡辺半藏守綱して
せらるる忠廣の中上お違なくんと中上先陣う
大久保忠佐柴田七九郎康忠に向い今日の合戦か
るる

利あるましと中上めし市方あつるいよみて
既戦つて又しし守綱馬ををえ先をく酒井
忠次石川数正本多忠勝甲斐の士大将小山田備中守昌行
陣をおやう敵の先陣山縣昌景をい柳原康政
手におやうの勢いよのて市方の軍兵ををるも
して追懸し勝頼氏勝奇兵ををるも横合より
切て入る市方果してお負てちりくは成て引く
石川数正おし留て志はしはてきをあつるをけし
山田昌行新子の勢をいし進くる酒井大久
保柳原をいして、しを敵の方を勝

さむぐんとて市馬のくゝいを移ち四し鑢め石片きふ
里あけて馬の尻をいとしサハ大君せひやく濱松の市
城さして引むし正吉ハこゝ手の者と必すあしき戦い
主後枕をなぐりて死を城中ハ敗軍をまきくさうり
ましし高木九助廣正とし者入道といひつて
飯る大君ハ世を鑢みぬくせそ信玄くゝいといひて城
中よりさせせむしハ人々漸しあはれまらぬは時日を
暮きしハ鳥居元忠市前よりし大手の門を志見ん
とくし大君作くるやう門をとらてハ市方の散
卒くさふりくし其上敗軍して弱みを忍せ

敵いきをふて城よのまし四方の門を皆あけさるし大
かゝるを焚へし腹のいしくかそりくさそそそ夕飯を
いし臥しあふ沸いひまきの聲きくゆしし是より
さき本多作左の重次ハ大君をかきしとあててき馬
射くとしてり立數十騎の中よりあめくし鑢くうの
敵一騎片きかとししかき切り其馬取ておひり
濱松の城よをせめて見集り大君敵きくし此城を
攻んハ市方多勢をいし兵糧又はくくしは事
いふと作あり重次つけたあてて信玄わらうむよと
新しより兵糧あくし積せんとあしやういよ

乃亦いあふる斜るるに大久保七郎左門の旗をもち
て屏礮を打ち落くる所方を集えける敵の旗をこて
大君なりとあひ先を争て崖より落る者もあは
忠世も鉄炮の者を下知して打ちてく敵の取てく
て濱松より来る門のあまのうをアそふんとせし
を馬場氏勝のしを制して敵敗軍して門をアそ
さるく氣色なきに伏勢ありとて引まら
あしをアらう鳥居元忠渡巴守綱舎弟同秀綱兵三百
引はして打ち出たふりも落くる所方より
関の聲を合せしとて敵あはるほりく逃る

柳原小平太康政のひまゝとき小高きまの旗を打ちて
の軍兵をあはれはるる引て城の東より西島
の陣をしきてきの城より来るをまらしとて
逃て陣取るをアそふし夜よりあはれて切りつる
あはれをてか一むらしかくて大君の市販をさふはて諸
將をあつたせきの用意を議せり大久保忠世をみ
せて敗軍のまゝ籠城あつていきまはる勢いあり
ん忠世はあはれに夜討せんとせん人々の手は足腰の鉄炮
よりあはれを集めてまらるるやとゆ大君も
感斜るる人々の作せて足輕の兵をアされらる

或いしよあまひにおちうせそのころ所三十人はまきん
忠世の手を合て百余人天野康景と共に引合せて敵
陣取らる屏煙を押し寄せしり
そ折らる武田陣は今夜夜討あぶんといひあひあつて
敵陣事とていある敵あつても似ぬ多勢うるとして
てよとてくる大方うらそ信玄大よかともき今日合戦ふ
宗徒の兵多くういせ今夜の夜うちいかにしがるうい
家康の軍のやうにうらそふしとてアツてうら夜明け
又兵を出して甲斐の陣屋の
おそいしういて
かゝるころさぬはよき石川家成は掛川の城をとりり

居しつその手の軍兵をうらうてまきいよまひり而方のい
まきいよ直しぬ大君櫓より敵陣を遙く御覧して富永
孫太夫の敵は敵國せんあるうらうらよとやとやとせあひいせん
陣のうらうらよ小荷駄もろく陣中へ煙あてやせし急
ふ敵國あるありやうとていよとて廿四日信玄陣を遠州刑部
ふいよ京足利義昭無道の振振あり信玄書簡を送てその
天子は参内せし大名をちかひに賂おこるも賞罰よ
具負の沙汰あり金銀をむさけり普請を好く悪人をえ
たしみえのい何きせらるると十ヶ余の事を諫めや
將軍よりとて

天正元年癸酉正月將軍義昭信玄陣に使者を遣はし
軍をやめよとせしむる信玄志すべし信玄人して平手
甚だエ門の首を持せ信長の三河に加勢を遣はし
事をせむ信玄甲冑の陣に人を遣はし諸軍の合戦
三河の勢後をよとす事なき今彼方より加勢を
頼しをいりて以てみやうとす唯隣国の義昭は
引く事しるなり色ハ赤邊とのよりを永く志すや
くんとやかくらじし信玄以外立腹して向後義絶
たすことしやかくらじその昔を將軍義昭より遣はし
信長と將軍よりつとらけし義昭信玄より遣はし

十月十一月甲州の勢遠州野田にせむとす城主菅治定盈
加勢の大將松平忠正とみんかきりてせきしういてまは竹盾を
積廻して篠の如くのちうくはひし二の丸をうそひし定
盈を本丸に引てせきしうに敵乱杭送茂木をたてまきし
金堀をやといて井戸の水をひきとらせしうに城中に
困して濱松より送る大君みはくら出あし敵の勢を
ろくもあやましくかきとす吉田は陣を居る
信長よ人数を乞ふとて信長とかくして加勢を遣はし
時芳林といはる伊勢の人野田の城中にありしう尺八の上子
て毎夜櫓の上より吹すうみくろをとてまは面白き

は思ひ與しけりある日竹の先紙を付くを小高き
所より鳥居三左門鉄炮の上より。堀の上より
はるうよんて大いなる大將の尺八をまくる所より
厚しやみといふも秘曲をかくしてやせけり信玄はして
休むといはけて鉄炮の玉頬をかくる勢にて
竹の下よりいふも鉄炮の玉頬をかくる勢にて
し息絶てやうやく生きたる病より
やうよんて定盈ハ籠城とてし討つる人を敵陣
ははるうよんて城の中にある者なる命を助けらるる
忠正と二人ハ切腹して城をこゝさんとすといふ信

玄ははるうて城さうよんて切腹及ハとすし
故二人城中の者のとらを引つて出し所をやうよん生と
し陣を長篠より引て二人をよひ出し降参せよとす
むしとすも最初奥平道文菅治貞吉等妻子を人
質とすよんて南味方となり程なくして信玄降
参とすよんて貞吉道文等おのこともう妻子をひりて
定盈忠正とか一人と秘しし信玄とすよん大君二
人の忠節を御感の余り物おのぬ二月信玄先達ての
落馬の痛しきよん番の兵置て飯岡を(京)將
軍義昭信長の勢はよきをそとんてほろやさん

と企ひそま合戦の用意をなす。細川藤孝度々
諫言せしうと起入を信長ははよし。起る使者をのこ
せ罪ふきおしむき。中ひらきて誓紙をかきさんといひ
又き入を治ひし軍を起し義昭身内の諸大将城を
石山堅田まき片く甲三月信玄病をこし愈たうと
又遠州の北北辺鄙よりちりり別は秋山伯耆晴近を美
濃よりくとして遠山内匠よりつら山右村の城をあき
むきて降参させ晴近してちりしむ甲三形ヶ原
の戦破して后ハ市領内の諸城主多くをむき、まてせし
信玄の身方とちり信玄譜代の家人と新系の諸人を

ほとりくえりて遠州の天方二股六笠角輪一の宮駄
峯足助宮寄の城をすりてを演松よせりけし病をこ
起り信州平谷に陣を引く大君の作は三河にり寝
所として他人をぬきしゆせんやとて市端信康君に宮
寄駄峯足助を攻し、せらば平岩親吉は天方を攻り石川
家成久野宗能は角輪を攻めいつし事なく城をおとせ
し、六笠一宮はかきぬて逃たり京廿六日信長柴田勝家
丹羽長秀明智光秀は石山を攻おとせ廿九日堅田の城
のり取り信長よりちり軍兵を引て上洛せり、
細川藤孝荒木村重逢坂の関まで出むりして二心を

旨申入しけり織田の勢都よあつて諸所の火をうけて義
昭の和睦を乞ふを待たせしと義昭あつては氣色かゝるも
四日をみてその第をうすれてゆく義昭防く事叶は
申るをうすしけり信長義昭と逢ふて祓人あつてその
何やまらぬ改めらる事をやいさせらるしけれは義昭
はとめて志すかをせしめり信長の飯田有て和議の又や
らるんをせしめり丹羽長秀に命し軍船を湖水に
造らせ細川藤孝の將軍の悪事かあるせする褒美
とせしめ京の在り長岡とて所をよめる藤孝をうす
青龍寺に居城して姓を長岡と改めしその子越

中守忠興大國を領する及て又細川姓よりつる甲十二月
信玄平谷の陣中よ死す五十三才子息勝頼は兼て諏訪氏の
養子しるを以て勝頼の子信勝を信玄の世つきと定め
勝頼は後見させ遺言しておのこ死せしるをかくし
病氣の付て隠居せしと世間披露し數百枚の白紙に
兼て自筆の書判をよへて諸國の文通の用意とし
弟信細の負くしちのよく似たりしに親類より病
氣見すしめ使者くるときも夕暮に信細の對面せし
故諸國よその実よ死せしるより久しくあつたりし故
信玄の人となりて業をなす武勇世よくして兵法よ

うけて二の丸を焼きあふ城番菅沼正貞本丸に入てみせきし
る大君の城の上なり熊山の砦を築き酒井忠次菅沼定盛
してちりせし師帰城なり(京)先達て信長都の攻上しとき治
中火をうけり廿一日飯陣して焼失の家も本の如く
普請して其家々の運上公役をゆるさししし人々大
二葉堵しぬ村井長門守貞勝を所司代し長岡藤孝
仰て青龍寺の城を普請し義昭の残党のそを
へとたきしむ直は浅井の領に攻下り木戸田中をま
えらる岩成左通義昭たたふ淀の城にまじりし和田惟政
芥川まじりし信長長岡藤孝のあはせし攻め

らる廿八日左通と合戦しちりし六の左通と中ハ勇力の
たてありし藤孝の家人下津権内と云者おとぬ
勇者もて水練の達人ありし二人戦ありし三合みして
権内はさと受太力なりし何と志しして橋の上より
たうた刀をなげきて無多と狙て淀川の中よりさんおと
おち岩成の首引くも水底よりおよき出城の事あり
ありてけり今肥後家臣下
津久米千石余芥川の城ハ荒木村重攻めし中
川瀬平和田の首をとるをぬめ村重は織田屋見
てせししとる多勢にて摂津を切りとり切取しし不
所領を下しむとてと六ひ中せしし信長その

勇氣よくあつて、ふまをゆるし 奏問して摂津守

よりし 上洛のときを供よはせられし 再度の上洛をも

五畿内の大小名、軍兵催促させし 村重一番の手

の者引つて馳系し 二條の第枝の島より名を

あつせし 池田の城主池田勝政ハ勝負を見合て催促し

あつせし 故義昭やうしたるをみておきて城

をきて高野よあつし 勝政ハ披官の小名多くハ村重ハ

心をよせし 村重ハ池田を兼領し 後ハぬ者ハ亦

ほろふし ぬし是月天正と改元あり 甲 八月武田勝頼

熊山を攻て長篠をもち大居より馳むるに玉ひし

ハ敵ハ矢先きをよけて一ち 要害の地ハ立ふりハ

日 大君伏勢を置て松葉多くあつし 火をほけ

させ玉ハ敵相をもち見て濱松勢ハ陣屋ハ火ほけ

外よりしを馬場美濃見ていや 烟の色白し

陣屋を焼く烟ハあつし 小山田穴山ハ手の勢ハ濱

松勢あつし 追うけんとて数十騎出し 味方の

伏勢あつし やりて生捕る事 叶をて勝頼長篠のよせ

手はよきと見て遠州黒瀬ハ陣をひく 長篠ハ

とろく おとよとして正貞ハ鳳来寺ハ落し 江 信長

近江の月々瀬を攻し 朝倉義景三万の軍兵をもち

之て緒谷の加勢と号し、余吾の海に陣を志き、勢を
よけて大撞下山の寨を守りしむ。十二日織田勢大撞下
山をせめ、おとせ、十三日義景陣屋に火をかけ、夜のうちに、
逃かへる信長をもろく火に手を忍て直搦追う。け刀根山の
麓まで追付り、佐々成政前田利家先をうけ、朝倉治部
齊藤龍興を生捕ら、その龍興を囚をうしる。よてより
掛津に住居し、三好并、一向宗の乱に人衆を集て一味し
をり、し事あるて越前におちゆき、朝倉の身を
よせ居り、かくて織田勢に勝つ、のうて戦て、いさみ、いさみ
て、戦ひ越前敷賀よ、いさみ、いさみ、首四千をそとる

ける勢いよ、かそきて、落る城十ヶ所あり、なり、十五日義
景本城の一粟谷に、籠りて、死をそ、家人ハ、いさみ、いさみ、いさみ、
一族なる景胤、景健等ハ、こゝに、敵に降参して、いさみ、いさみ、
六日、夾山の城に、ふけ入りぬ、十八日、信長龍門に、陣立て、
義景の行衛を、さし、てきを、切ら、敵を、とら、いさみ、
夾山に、城主朝倉景鏡、心う、さし、して、義景に、いさみ、
世平、朝倉の家、いさみ、いさみ、朝倉の先祖ハ、但馬の人
原日下部氏なり、代々、斯波武衛に、いさみ、文明年中、いさみ、
その子孫、敏景に、至て、越前の國を、領し、いさみ、いさみ、大名と
なり、数代、いさみ、義景に、いさみ、甲、甲斐の大將馬場山縣等ハ

くへくへの中合て信豊々城々入る信豊々やうて對面し
市辺ハ今宵徳川の飯系せうを糸新人有てまゝめといふ
こけれハ美作守おとろきたる振してこれ敵よりまは
し者のいそせし事かゝらんむさと信しあふあきら
まといふ信豊基盤をいとしけとゆりくと井志まいて
ゆりうぬぬ道壽ハ夜食をぬらまんと振きしうそそ
まとい憶せに糸てゆりうぬぬ食しぬ道壽人を門外
おし作州こそ謀叛の企あうて道壽々為す誅とて
ころとをうまといもせけと美作守ハ從者さるらん打
ころいしハ依て信豊ハ疑いのころとけいり美作守ハ

筑手ハゆりうとそらう一族のころに夜ままされ城を出し
を晴吉さうつて追ひけり奥平一族返し合せて戦ふ
所ハ大君ハ本多廣孝松平伊忠をむくのためはつえ
はしたれ廿日敵の軍兵五百人追掛しを美作守その子
九八郎手の者二百人そ瀧山ハ打破る廣孝と一ツまかり
て筑手の城をせり晴吉と戦て又打破るぬ勝頼大ニ怒て
人質の仙千代を磔まけりあ
今豊前中津拾万石
奥平大膳大夫 越廿四日朝
倉景鏡義景の首を持ちそのみかりし子愛王をつとて
信長の陣ハ多々信長首を都々のふせて六條河原
さらし愛王をとりめその一族のころに切りさて降参の

大将前波長俊をかりし越前の城主とし明智光秀津田九郎三郎木下助右衛門を付け置きて廿一日凱陣してついで緒谷に向はる廿八日羽柴秀吉長政の父浅井下野守久政と戦ひてついで進て緒谷をとり巻く敵の方より頼む切し朝倉のついで大敵し折こむいぬ今は何を頼むとて皆ちりりし落しけり九月朔日長政の妻と三人の娘を信長の陣におくつれし

妻は信長の妹の故に娘三人がしを太閤の妃淀殿次は京極氏に嫁し未は台徳院殿の北の方を頼む

自ら殺して浅井の家はひ絶し信長浅井父子の首を六條河原に掛させて其領地を分て秀吉はついで石とるる是より以前佐々木兼頼の子左衛門佐義彌近江

の城を立籠て緒谷を一味し織田勢数度攻まるとおちり四日信長柴田勝家して攻まるとし義彌は逃し先達て千草峠にて信長を鉄炮にて射し善住といふ者城中に居しを捕へて竹鋸引を兼頼に石部をかくま居しついで甲州に落ちてついで信長朝倉義景浅井長政二人の首を漆をぬいで盃として軍士の酒をむく

④長宗部元親我慢のついでひ者で毎年軍を起しかのこしついでついで者をついで元の国司の家老のついでついでろほし土佐七郡の内を六郡押領して幡多一郡を国司の賄料とをほとり謀を以て国司中納言兼家卿を

逐山兼家卿ハ豊后ニ逃テ大友氏ニ身をよせり元親人
目をうろ兼定卿の子内正を主人と作りてむすめをよめ
らせしハ幾不とるくして悪地ニ所かへせしハハ毒害
し一條の家絶より元親國主とかり美濃の織田備前
の浮田よりみを結いてより立とて ④十月武田信綱
ホシの里より打入テ陣取 此時大君いさ長
篠よりゆむらひ 本多重次榊原康政大
須賀康高と濱松の御留守居より重次より
留守の料より近き武田信綱陣打破てせりハ
のり敵を戦をけして破しんせとて三千の勢を合て
森の里より押寄せあて打破る馬場山縣より宗徒の

者としハ逃をまて夜の間に逃り大君市凱陣のしり
ぬんで信玄の死よりほりたえし甲州勢度々
負軍よりより誰よりかり信玄の死せしりを知
らぬ者かり勝頼氣の毒と思ひ一騎當千の兵を多く
して再び見付陣をとり阿づりの民家より火をかけて乱妨
せりしと人々の心よりそをそし士卒逃る者多しハ
遠州備原の陣を引く諸將ひと先ッ敵國かりし
ありと諫しるを勝頼大軍を起し敵の地より入り
せりしとよりあるとて信豊氏勝下知し
遠州諏訪原の城をまらせり ④織田の勢三好

義継ツルのりつゝも揚州若江の城をとり巻てかゝり義
継自殺す ④但馬の山名宗仙因幡の山名中勢大輔豊邦いつ
も先祖より守護職の家よりて其國をたんとせんせし
ニ尼子のさうりにハ尼子のちよんきニ子ほろむ後ハ毛
利よはき勝久々再い軍を起せし時又勝久々一味せん
勝久再いほろひしより吉川元春二國をたんとせん
て富田の城より出陣し子息元長と因幡と打ひくは
豊邦出向て降参す進みて但馬よ入しうを宗仙も
まこととせしさいきよと降参して人質を送るう滞留
数ヶ月の内一人の命もとらぬして兩國ごとく平らけ

十二月弓矢を袋に納めて飯ころ ⑤今年勢州長島の一向
賊尾張の西形伊勢の別所片岡等ハ城を築き、つららの民
家をたむむ信長軍をさしむけ別所と片岡を攻め
しはひハ伊勢の國をたんとて飯ころとせしハ大
雨よりつらら凍死する者多し長島より射兵三千人
をもちて難をたんと射兵ハ織田の勢敵を
敗北せり ⑥最初日向の伊東大膳大夫義祐島津
薩摩守貴久と数年の合戦ニ義祐度々勝軍と
て大隅一國平らけはひハ薩摩半國を分て取
りしより義祐貴久引はき死して義祐の子

らる甲斐の大將山縣昌景をせ向いけしハ信長ハた
くもして陣を引くるてきほひハ十余ヶ所を攻め
せし信長出陣せし敵ハ深入せし
④大君越後の謙信
音信贈答あり玉も三月越後の使者起りて甲
州征伐の企ありとや也 大君もるも馬を出され
て武田らうもひ死しり 所領地も打入玉ハ長篠の城
ハ要害ハよよるしとして堅固ハ修覆せしめらる
⑤信長参内後三位参議に任せしる信長南都東大
寺の蘭奢待を拝領を願もして南都に拘りしき
いゆ 勅使日野大納言資定卿飛鳥井中納言雅

教卿立合のたゆ下向なる ⑥茨木城主荒木攝津守村
重伊丹を攻めき城をさうりてうつし任中川
瀬平高山右近を腹心の家臣とせなく高槻
多田三田有馬の諸城主も手も付て威勢國中よ
振ひぬ ⑦四月信長奈良より還るる踏て大坂の
一向賊もちをぬく事多く打をしらせ本願寺の
領の夢を刈らせ作間信盛を天王寺に留めて陣を
くせけり ⑧大君遠州乾を攻て瑞雲の陣し玉
しう大水出て兵糧尽きて飯り玉つふを乾の城主天野
宮内景貫難所追迫て打てり里河あそる

負討死数をあつて菅治定盈阿つたよ城を野
田よきとてふしは勝頼ハ美濃よりせ先よせら普請
いすこ成就せよせし事叶えしして定盈ハ逃し
六月勝頼高天神をとつた城主小笠原長忠落城
且夕よせあつしし濱松よ達も大君加勢を信長
よ勝このみ阿つらよハ信長よはらり出陣せら大君
合戦の御用意あつて信長をまらあつてきハか
きくよう加勢の未ぬ間よ攻落せよとて皆一同よ城
乗るを長忠堅固よふせきよせ付て勝頼せんら
て長忠をまらして降系させ番人を城よ置て軍を

やえら信長ハ荒井の駈まて来らよて城ハえ落
たつと史吉田よ陣を引きあふ大君御礼のあ吉田
よ御出たつ信長大君よ向ハと甲州の勢方度よ打
入ら君ら遠州よいすして防さあふと信長ハ
心けいらく近江より畿内の合戦よ打勝つる御
君の御うけしとて黄金二百枚をかくら勢長島の
賊乱妨まらとて又篠橋島井矢
島中江よ寨をまはしてみる山川よ依て要害よ
構へけり七月信長みはら出て賊と戦い小田松の木北
渡よて打破り軍兵をかて篠橋等の寨をとつた

坂よ近ゆくその地を瀧川一益よ始りて北伊勢五郡の
領主となる^中尼子勝久は但馬より因幡に入しうそ山名
豊邦とまじり毛利よそむきて一味せり勝久勢ひよつて
十余城をせぬまはひよ因幡の象布を攻むむこの城
ハ大坪甚兵一之毛利のたぬまよりしう教度尼子の
勢を破るけしし勝久攻めくみて奪ふ立たわり諸城
主を拓きしうハ國中多く尼子よ降ふそ大坪甚兵
今ハ叶をいして安藝の本城よ近けゆく^濃十二月信長
諸国の大小名よ使者を立て道の里数を定め並ねをう
る関々の運上をのそしむ上下の人こをるハこ便

利を得しう^中浮田直家備中松山の城主三村備中守元親
と合戦年をうさう^中けり元親一族多くて軍つよ
りけしし直家安藝と申るをうして加勢をいめし毛利氏
左門佐隆景をけりしし合戦明年やまてつさぬ
元龜三年己亥正月天野康景甲州よ勝(き)吉夢つら
とて言上を大君悦ひおふ廿日連歌の會を催しむし
今年勝軍ありしよさう市家の吉例となりし今
も行るる二月十五日市鷹橋のこは濱松の城をいて
あひ道のほろりにて十五をうまの童面魂世のつ^中の
人ろろをりしをあらししはなる者の子まてやあると

たつ子させむるはまじしこそ井伊直親のこゝろし子よ
てん父の今川の世子然そ多うりしとき無実のはみよ
殺さきて今かくおちあきてはとヤル色ハ大君ゆぢき
さる者の子うり子便の者うるはまじしよとやはく(せよとて
やうそ井伊谷の本領を玉ひあひはくしみりしよハ
やましぬくまうしきまう長篠の普請とのひしよハ奥平
信昌よ玉もる六の城甲州にたきつらうよあはしハとそ
信昌まじく堀石垣を堅固しよせきの用意最重
しよら大君御感斜らうそ信昌ハ若年がうしし
たのりしき者かり作らして松平景忠家忠親俊を

付る中安藝の軍勢因幡を攻しよ山名豊邦まじ降系
し尼子勝久ハ鳥取の城をまじ引き若左よまじり別
軍兵を分て象市を守らうし中故將軍義昭紀州よ
居る事一年何りして日々よ困窮せり備前よゆ
きたりしよ浮田取合を三月備后よゆきしんも毛利
織田信長と不通し義昭の館を備后の鞠まじし
ら一旗下の大小名よ勤仕させらるハ義昭の門前よか
秘て鞆置し馬をばくするよとハるらぬ京信長
忝内せらる此とき公家衆積財よ困窮し朝夕粥
のしきらう居らるし信長其積財をかすの如く

はくかういゝあらしせしる今川氏真のふと五畿内阿ぢ
おちさめいゝたらしし信長の勢をうらやぶころ父義元
ハ信長の為ふ殺さるるをうらみも思ハも京もよきて
多よりを求ふ信長も目入して持傳へし家の宝
物を献上してころ氏真兼て蹴鞠の上手なるもハ
信長ハ公家衆を管應せし日氏真を呼出し家人
と鞠を蹴させし氏真ハうらみもき氣色るうしと
きく者ハ弾せぬいかなかりき(撰)大坂一向賊大和田
若をよほきて荒木村重の領地の渡辺神崎を取ん
とて村重大に怒り賊十三渡ふころあて弁やう

大和田と天馬との寨をうらみとる賊おそむして出るふと
叶をよ村重大も吹田厄ヶ崎花隈能勢の寨をよ
はきそふせきの用意とる(甲)武田勝頼軍をよの
毎年兵糧金銀のふを國中より志りつとる百姓を
難義よめし事かむしる譜代の家人多かり
よより所々の合戦ハ勝利を得て國中さるおとら
さうころはひも傲をまはして天下を極んとめ企
ころ長坂長閑迹部大炊屋佐と能とまけんをとら
よがり権柄を並ぶ者かき勝頼あつとて一家
中をよい集て出陣の評議ころ馬場山縣内藤昌豊

等言葉をもろへて年来の合戦打はき、民はくさ
圍かへけぬ今軍を起し玉をも必定よきものある
まし、志をくく威をやるもて時をたて、初めは
ふましく、ゆるりとせし長閑大炊の西人志より、
出陣を進めし、四月勝頼遠州に打入て宇理と云
ふ陣をとる、最初岡崎の小者、大賀弥四郎とて
才発なる者あり、大君の布氣に入て二十四ヶ村の年貢
算用をたたく、有り福の身となりて驕をもく、
はひし悪事を巧て山田八藏倉地平左、小谷甚左、
門と言合せ、勝頼陣中、多うて、若君、信康君、
岡

崎の城をませらして、宗徳の家人、皆大殿、志し、
松、あり、大殿時々岡崎の城、入のせ、
先を、岡崎の門番、
入、
わ、
し、
た、
そ、
ま、
あ、

うしろいあまをとり勝頼大よろい日限を定めけ
りかろ所よ山田八藏の後悔のころかちりて降きしを
へとりけり信康君その夜志のいの者を八蔵の宿所はけり
をさし密誅のころをさしりて濱松はけり倉地
平左三門事もしりて知てかんとさるるを捕へて切り
小谷甚左三門甲州よ逃さるけり弥四郎をばしめ
徒黨の者親類まて捕へてくひをくけさらししは
弥四郎をひきまゝにし手の指をさるり足のさちをぬき
竹鋸みてくひをさるり引て七日目息絶てけり勝
頼ハ遠江の國をめぐりて三河の二連木よまゝり弥四郎の密

計あらをさしたりとさしかるとの大軍かこりて本國を
出切りてかめくころらんやとて二連木牛久保
のあしをさしりて大君軍勢を催さし吉田の城よ入
り若君キカハヒラフ美原よむろをさして敵をうちさるりけり時よ
信玄死せし事世よりくるるけり勝頼せしりて
披露しけり ⑤三好康長河内の高屋よあつて本願寺
よあしをよせ一味の門徒等河内の國十七ヶ所よまゝ
り信長京都より攻下してけりけり破り掛津
和泉りり一向領地の表をかりとせりしは康長降
人となりて河内よとく平らけぬ塙九郎左三門直

正して攻めたりたる城の堀をうたせらるる(参)五月
一日勝頼二万の勢を押し入り長篠にせんとす城主奥平
平九郎信昌かくちりて少せきしは勝頼叔人の武
田兵庫介信実を先として宗徳の士大将七人長篠の
上馬の陣の要害より久床熊山姥、懐、旗、しりの
いそぎて城を迫り穴山信良を西川の陣とせそ
兵糧の乏しきを切る大君信長に加勢を申しあふり使
度々よ及へし信長父子武田の勢いよおそきて兎角の
命んしよ及はし長篠の危くんがし信昌
の父奥平貞能美濃のゆきあるうちよあひやぶる

織田居たりし美引がら十一日信昌城戸をひらき打て
出て攻道具焼くして十二日又切て出て敵をうちきりけ
十三日敵夜よまきりて身方の壘城をうごひたりし
攻道具を作し堀をほり柵をかま(四方よりのりし
とよ)信昌松平景忠と士卒ををけまし手負をい
そり防禦日夜かこりし十四日諸士をあはれ評議せり
やよ今城中人数をくちきよあらし具足打物矢玉よ
いそぎて不足なけしと唯兵糧よ多をけきあり今より
十日の内よ後まきの勢をう合はれ腹切て士卒の命よ
かえん誰りあし此事大君の御本陣よいあしと

あつけは鳥居強右衛門勝高六の市使をせしめしうけ
たまふん去らるる歎き問わく我まふいふこといふあつ
せん事計りしし万一首尾よく切ぬけなく向いの山は
のろしをあけ合圖をいししとて必死の覚期を
まそめ辞世のうゝを書のこししやみよまきし繩をさ
りて城をさるうやあつて向いの山は火のたきしし城
中よりさるる大方かゝる十五日市本陣かけつけ
る大君市前より然して信忠の加勢をては發足せとて
ゆこり軍配しをや定まりぬ後卷せん事二三日の内を
きこるるい汝はさそはるるしるめをしし休息し

てより出陣の供せよとかなせけしし城中の者も
市返事をまら遠くことおひはる然このまは市いふ
玉をうかんとしてその夜をくよをせううてきの竹束を
かきりこむる所をてき又咎りて矢庭に繩をうけ勝頼
の前より引立り勝頼下知して繩をとくせ林んころり
いふはてさていふや海城中は向い主君の後より
玉をんる百日ははも叶ふししし城をあけて
降参ししと中軍し仕かせらる恩賞は汝が乞ふま
うをへしとて十余人の壮士に槍ももむ作て城の隙隙
に送りせし勝高城をえあけて大音聲に主君織田

後とや合しめい十万の軍兵を引て明日ハ出陣し
玉をんとてきてきをえりころしよせん三日の内をそこ
をへるをたとをそよせき玉へしとてしよを撃つてお
そよをして鎗四方より胸をたぬきぬ十八日信長
父子遠州設楽ヲ打てて其勢都合五万余騎西よむ
十五ヶ所と陣をとる所方の勢ハ二万余騎高松ヲ打
む山馬場氏勝勝頼ヲ向いてきつてついでに志も大勢
合戦してハ叶はずしつてひきて飯りまへひしと
たつハ片時と早く城よのまん多負打死多くし城を
かきしるるんとて世のあるところを防ぐ一しとやし

せも長閑勝資二人てきのをそをたて逃去ハ武士の
せつら所し信長家康一同よくるハ天のあつた所一戦よ
生捕るも天下ハ当家のりあるとて勝頼大よ
悦ハ宗徳の家人の諫を和いそ諸人の眉根をよせそ今
度の合戦揚貝きく事よあつしよをつよやまけ
さるふとて勝頼ハ小山田昌景の勢をひき分て城を
攻めその身ハ五千余騎を引率し瀧沢川をうら渡
陣をこえて十三所流をうらふとて酒井
忠次ハ此をたて敵ハ死地よ入らそ味方の勝利う
くみかして大君の御前よまつ忠次三河の人を

ひき具し六の夏よりなる南に向て山路をたしむ
鷲の巢より彼要害を攻めしむらん明日の合
戦に勝ぬべく覚へしやさう信長よりあるそのよしを
もろこと作せりや 奥平信昌の書簡をたして見て
大軍のうしろまきまてよ至まはよろこぶ是よりく
てきてしし急攻のふらも鐘をたきて報しやうん
はたろあやまうに落さしとまうしはかまうてを
やまう進そ市方一人もあせり事あまうし
かきまをし鈴木金七此状を持繩をたう堀をかちり
てまはかち堀の上も綱をたうて置とせしを金七

たうしに綱切り破りおよき上て 大君よかの書状をたし
上りし市悦斜かきし信長あまうし物見をたす
まをせかちりて敵陣とのい人数のあかちりし
とちま人に色をうしあひけしハ士大将石集て敵のあり
この評定なる酒井忠次ちの尉 その座あり並をた
まて信長に向い某昨日たしうあてまうし
軍勢なるまかちりして大ねかちり士率にた
ままあまうし款にてまかちりしとちま信長様
るこしし臆病者の目よ草し木と款とあちりた
南門の海道無雙の剛の者とあちりてまかちりし

かけ箇先鉄炮もておとる處しとて夜の間に柵を並へ
堀をほり鉄炮の者三千人をくはて前田利家佐々成政采配
させてきを一反をりませせて入る千挺一度おとる
は及しと下知せり大君も足輕の鉄炮のせり引き
はて三百人大久保忠世忠佐兄オはけらして先陣も
あ一五十一日の志の先酒井忠次大雨を志の難処
を越ててきの陣を押し入りろの山より火をさるち
関を作て切て入るおはき叫んでせりふと兵庫
頭信実姫として宗徳の大將多くうも奥平信昌も
同しく時を合せ城中より切て出つ小山田等も勢かのり

陣所も火をかけて烟まきられて落ゆくを追はれ
討ほとよ小山田も五百人とはてかへし戦ふて松平伊忠も
たまけれと長篠のよせも負軍してけし忠次も信昌も
勢を合せて敵は砦のこも焼をこもし六勝頼も陣
より烟を望て皆氣をうもれりんて大久保忠佐兄も
向ひ今日の戦い我等もた先もい當のてき信長の加勢も
先をうけさせん無念の次第なり多し我等先をけし
て戦はれやとよ忠世もしくもやもものうもとて先
足輕を出し敵も向て鉄炮を一度もさつ武田方も
山縣三郎も掃昌景の勢三千人鎧ニコロをかむけ面しり

を曳き上て進こくるを鉄鉈一度放しけ又弓の
を引つてさし先引けめ射るほとと敵過半うき
けりのおる兵ひるまはをむを兄弟八柵の外に
小菅廣瀬三科として一人当千の敵と名のうかけ
かへし九度までおそたくりまた信長をうり
家康の手の戦い敵味方何きひまありとも
小金の標の羽腰よさしたると浅黄の幟は
敵つと又さ味方より見えてきよありか
き身方のさういさたらを誰りあるん
大君の御陣をせよとてかくとや
大君よこし

先しあまの家康侍蝶の羽は黒餅の兄の大久保七郎右
へ忠世黒餅は同じ治右衛門忠佐と蝶の羽の弟をと作ら
信長はよしきい何と味方とやうさんい
もま大剛の兵うぬかき等兄弟も似るん信長の手の者
よはいますいぬとそのおいりかくて昌景はあを
之織田の陣をを向ひけるう三千挺の鉄炮は
たとして昌景馬よりかちその郎黨首よりて
きてはむ武田信豊同信綱小幡備中入
しう味方織田のう鉄炮はあは矢は
百千のてきさうくは成てはけちるう北より進を

馬場氏勝多の者多くあせて引くを真田兄弟入かゝりて土屋七やうて押しき柵引破て入んとて皆鉄炮中て死を御方の人とほひて出北のてきし敗走ししハ氏勝ハ本陣より出玉とて送り送る依々成政信長もむらゐてきぬ旗動きぬ徳川の勢たまるまゝししもくひ玉をせやとて信長瀧川一益の陣を先より立て十五陣一同大鼓を鳴らしして攻かゝる関の聲天地をうたう先長閑勝資まつ先より逃出してき大敗北し譜代の侍多くいゝとせぬ氏勝人を本陣より追まゝし今ハ出玉とてなりとくおちさせ玉へ某ハあを留て追まゝ敵をまゝしとて一討

死仕りいもとて八千の騎馬武者をまゝと一命をかまゝり戦て郎等ことくくうとせけしハ小言きぢまみ飛上り勝頼のおちのいゝるを忍て今ハ心安しとて太刀をわゝりて投きて信長の雑兵を振きこり首とりて高名もせよとて雑兵共槍もまをほろけしとてお取りつひハ川の端まで追ひ迫つておとる首一万三千と記しれり溺死の者いかにをまゝを勝頼ハをこを捨わつたも百余騎も取巻きてほろけしとて逃ゆくを御方の内よに聲をうけ武田殿ハ先祖相傳の旗をしめて逃し流石も命ハをまゝのまゝと雑言を敵ハあ

返て相傳の古旗用ゝ立祓をまてしるぢりとふさら
ハ馬場山縣なるとの古兵七用ふあつて捨多しあるよ
とてとれと笑ふて引くけり勝頼も稱て高坂昌宣
貝津の城をましらせしり敗軍をきて軍兵引来り
勝頼をむりて飯沼かて筑手岩屋鳳来寺なりんと
大め置る武田兵をさあつて逃りけり大君
奥平信昌してそとに番の兵をおもて廿五日信長
の陣より序礼の為集會しあひて大の勢のつて甲
州に攻入るなり一戦も武田を亡くすんと宣ひ
前田羽柴も此議尤志多くしと申せしる信長

ハ軍兵はくまたりとてまて入玉をきてまきの死骸を集め
塚を築て凱陣なる大君もせいなく序飯城なりて信
昌をたんと此度の勅賞として長光の刀一振刑
部吉備山梨等三千貫の所領を加へ玉をりその外高
名の品よりそとに勸賞ありけり中浮田直家小
早川隆景と備中の國に滞陣数ヶ月直家三村元親を攻め加勢
を小早川に頼む事二年の
未あり五六ヶ所の砦を攻かり敵ハ本城の松山に落中
さしうも今月松山に攻よせてのりとも三村元親逃て
死す六月一日大君二股の城を攻らる依田下総守幸
成子息右門佐信蕃父子武田のため守りしり打て

出て雨陣小川をへこしてさへなり敵の方より朝比奈弥
兵衛尉と名乗て出松平彦九郎うらむ取て引くを所内の人
内藤弥三右門家長ハ弥三の手まかりなるう当の敵のうけし
と追かして放た矢朝比奈々鎧のうしろより前へくは
と射ぬきしういなりとハ少ししたまうまきうはしめて
死を才の弥藏ハを死見て兄う首とせしと押あさ
あつて切てしう家長又とはてつゝいまりし
放つ矢ハ真穴中を通うとして是れ一回くたをれ死
し朝比奈兄弟おろを見て家長を同くけ切てしう味方
内藤討まははけやとてかめき叫んで馳よる敵討

を引いて引てゆく明きハ二日城の大將依田信蕃所方の
陣ハ使者をたは誰人の所矢をそれて為朝々敷経々所ハ勢ハ
ほろかろき入てんとて家長ハきのみの矢をそ送うける
大君ハのよきしりし家長を所前ハ欠さし
所鎧の上ハ先ハとある所道服ぬきて玉をうけり
かくて大久保忠世ハ二股を攻させ大君ハ光明の砦をせめ
下ハあし酒井忠次奥平信昌所礼の使者として美濃
よまし信長兩人を所賞美ちるは九八郎ハ此度の
切無雙かり武者ハ分とやせとて刀をくして玉をこれ
外ハ物多く玉てかきさる
①浮田小早川の勢備中常

山の城をうのみ三村高德上野介を生とて國中こゝろく
いひまゝに國境を定てうへる^遠七月諏訪原の
城を攻る鳥居元忠作をうけた由をう城のあつた由依
伺ふとて城中より放た鉄炮を左の股に疵を蒙るはま
よりかけひき自在なるをうし武勇をおうくをうとて
①越前かつの國主前波長板騎て無道かりり國中
そむくりの多し一向門徒その隙に付込て乱を起し
故の朝倉浪人これしとて城にたてこり加賀
の國人と一味せり八月信長出陣なり若狭丹波丹後の諸大
名をせ集て其勢都合十万余騎虎支驢津河野の城を

攻落し龍門寺を破りしうそのほろの七ヶ所より
祈の城中の兵をふまかちて逃る所を織田の諸将を
せ向て追うけ追は免はひし府中の城をおとし張本の下
津間和泉朝倉景健等を誅し余はちりりよりふを
さし出して老弱のこころを皆切てきて又諸將を加
賀にけしして一揆の城を降集させ十七日のあひ
に加賀越前のお玉一面を生捕りちくい五万とそを
これるうらる法度を定め悪政を除きて凱陣うらる
越前をハ柴田勝家は玉をう内府中十万石を佐々成政
前田利家は玉をうて法度を定め悪政をのそきて

の家人と下り 棹舟公の四男 系圖云々 義春失玉ひ子息亀千代宗春

とけりかひせし康親その家の事をとうかひりし

宗春をたてけて諸所の合戦功をかさめて御家人のか

まふ列ある大君か祓てたのもりき者ふおほしけ

りる故に今なの作を蒙りし(康親のさよう軍馬を

あらし兵糧をたくく毎年甲州の寄手と合戦して

負軍せさるし 今石州濱田六万石 天保年中棚倉移 ①毛利氏の勢象市をせ

免落しきみて若左をせむ尼子勝久今ハ叶を此とて

但馬にけゆきほとかり京都よりくせぬ生余尼

子のためちりし城を皆攻りしてち因州一面

平らきりり ②十月信長上洛一向の門徒等中るをり

を願ふ信長本願寺の急みほふしかきりるをりりて

願ひをゆるさしけり十一月叙爵して権大納言兼左衛

大将に任し嫡子信忠秋田城に任せり最初信長の姑

岩村の城主遠山内匠の妻となりて子なく信長の赤子勝

長を養子とせり甲斐の大将秋山晴近岩村の城をせ

免落せし時ハ前よりし内匠の死後なりし晴近の城

を取て内匠の後家を妻し勝長を甲州に送りぬ

信長此よりを字怒て攻玉とちかちれ信長長篠よ

了飯陣のほいて教日より巻て攻らきし勝頼

後まきをさるる叶を以て今月十日晴近籠城叶を以し
てうせすの中を切破てかんと企夜をまさりし信忠の陣
をおそひしうと信忠打て出て城中に追ひつけし晴
近せんくさるる廿一日降人を出しうり信長は出を
磔よりけ姑をいふおせしるる
①十二月二股の城主依田幸
成病死し嫡子信蕃父の代て守りたり大久保忠世の
まきしと攻んとせしう神原康政を加勢しして此
うをさるる信蕃は本國甲斐より加勢きこころれいし
か存忠世の城をあけしし高天神の城に引て入る
②濃
作間右門尉信盛刈谷の城主水野信元と中あしかり

しう先達て岩村責の時城中兵糧はき秋山晴近金銀
をちらしして刈谷の領内より米を買入る信盛よき
見付たりとて水野こそ武田方よ心をよせたりと世間
いひしれさせ信長に向ひて信元は岩村の城中に兵糧と
かりたり御用にあつししとて信長使者をけりし
きて市吟味有しし信元は只商人よ賣しものし金
岩村より出たりしは後まきをせんせきとて信長の御使
よ家人をそへてけりしし中ひらかんとせしし双方の使
者途中にて酒をさるるひきしものより争ひ起て切合
信長の使者殺しししは信元をかきまて大君をた

のみ系る

信元の妹大君の所
実母がれり

信長まじく三腹しせむ殺

しあへと中送る大君ハ信元を大樹寺ニ蟄居させて

宥免の事を信長ニ申出さしき入らねせむ石

川敷正を大樹寺ニ送らばして切腹をえとけさせ

信元二人の男子逐電しけしハ信長の保として刈谷の

城を作間信盛ニまゝ信盛おとく水野の一統を遣

まゝひら信元の末子今年に生れ二輩といふ人

さうしハ乳母の子の如くしてそしてハおとち

くならて知恵さくく人ニまゝしハ土井小左利昌

とよ若やしうて子とせ大君の所家人とらつて

土井大炊頭利勝と名なり而三代ニ仕たてまはり而老中

を治と名名臣と称せしけり

下總古河
八万石

甲勝頼武田家

の武威おとくたちをるけき相模の北条子物余多送

りて中なをりし北條の妹を妻とせんを北條兼引て

おとちより毎日のかくり物絶はして北條は被官の如

かりけり **勢** 伊勢故國司北畠入道具教織田家の約束

従ひて信雄子國少は信長の二男大河内の城にむ入ら

実子信意を田丸の城に居しけり此人きもめて

肥よとらたらるるハ世の人ハ大腹所とせ中けり具教

卿を大所所とせ又三瀬のまじりけりハ三瀬の所

所とし中を信雄家片きて左近衛中將子往し市本所
とやけり 今出羽高島 二万石 ⑨肥前の龍造寺隆信をて國中

を平らけて猶し四方を多にばけんと企松浦肥前守道可
今平中六 万石 宗對馬守義細 今對馬十 万石 皆降余して配下とら

壹岐五島しその多に付し筑後肥後にお入て軍す
り今年まで三年々向にして大に定めし大友
宗麟酒色におふして争をん

天正四年丙子正月勝頼軍を起し虻塚にお入る 大君
市馬を出しおしけし敵の勢少し退く味方進んで芝
原に陣を布 てさし十里辱いて陣を大君戦ん

とし五月内藤信成いさめて先年三形ヶ原の敗軍かや
うの事よりおしつらんとや 勝頼としかをんとしけしん

高坂弾正いさめて去年長條の敗軍うやの事よりか
りしとやと飯團せり 十一日大君の作として今川氏真を
再び駿河よりしむし松平家忠をばけらる こゝに松平康親の故主 東條義春の子

氏真に駿河の山本の地半をまらせしむ半ハ牧野の城主
周防守康親におよして今川の家を事を執行ハせり
濃 信長近江の國に居城せんとして安土の城築せむし
本丸をて成就ししむしはさくさむうはりむいて二三の

丸堅固に築せしむし美濃の岐阜をハ嫡子信忠の

城と定めし一信忠後四位上_ニ任_テ信長の改事ハ余_リ
まじし_シ方_ニまきたま_シと_シ下知行ハ_シ法度の事_ニ即
坐_ニやみ小役人町人百姓_ヲ一切國法をかりん_ニし_テ
少_シの邪_ニなり_テ領内盗人一人_ノ形_ヲぬ_リして家毎_ニ夜
ハ_カを立_テ暑中旅人の道の木陰_ニ休_ムもの皆荷物と
用心せて眠りけり_ニ世_ニにての不思議と_シい_ハぬ_ニ
リ_ニ四月信長上洛本願寺光佐_ヲ叛_キて海口_ニ石垣をま_ツ
き_テあ_ラす_ニ四國の大名を_シら_シる_ニよ_リ立_テ乱をか_シさんと_シ信忠
宗徒の大將を_シは_シハ_シき_ニ五月門徒等と合戦して敗軍
よ_リ及_ヒり_テハ_シは_シく_ニま_ツて_シい_ハす_ニい_ハす_ニま_ツる_ニよ_リ戦_ハり_テ

打破_シて首二千七百を切_リとり_テは_シひ_ニ砦を築_テ石山_ニ
迫_リて作間信盛を惣大將とせ_しる_ニ表_シ六月酒井正親_ト
老_テい_ハす_ニあ_らす_ニあり_ニ大君を_シら_シる_ニせ_しめ_シい_ハ平岩七_ト助親
吉_ニよ_リ作_シて医療の事を_シら_シる_ニせ_しは_シく_ニも_シその家_ニ入
らせ_しむ_ニい_ハす_ニい_ハす_ニ漸_ニ進_ニ習_ニして容体を_シら_シる_ニせ_しら_シし_テ
う_はと_シあ_らす_ニ卒去_シて_シその子重忠_ト忠利を_シ大君_トま_シて
御目を_シら_シけ_しめ_しい_ハぬ_ニ中_シ七月毛利氏本願寺_ニ兵糧を送_リ
と_シて兵船七百艘木津浦_ニよ_リせ_しる_ニ信長の_ニ下知_トして
和泉河内摂津の軍勢兵船を_シら_シる_ニて_シい_ハす_ニも_シ毛_ト刺_シ
勢_ニより_テ火箭を射_テけ_テ打破_シては_シひ_ニ石山_ニと_シけ_しる_ニ

④大君乾の城を攻む小城主天野景貫難所に出向へて
戦ひ味方敗軍せしむる大久保忠世鉄炮の足掻引を
くはて石峯よりちのほり城中を足おろしてはるす打ふ
打けむハ景貫もも要害を去る、逃はり味方事
なりく飯陣を八月大君駿河に打入る越後の謙信し
合せのため飛弾を打入進て越中まで攻込ぬ④最初信
長加賀の國の守護を戸次右近改継に命せしむるや一向
の一揆起りしに改継打破て首余多取りしけむと一
揆いよく盛みなりけり今月作間玄蕃允信改をた
とむる戸次はかきせり 信定数友の戦に打ちらぬ④

上杉謙信年来の敵武田徳川家との合戦といふるに
けるハ本國にハ心置りく加賀を攻むるとを一向の
一揆とも三千人栗柄谷まで防ぎしを打ちしと十月
能登の國に攻入しを一揆又防ぎて破るし謙信敵
の城たやましく落す時又寒くなりけむハ攻むる
城番の兵を置いて飯もり 大君謙信の書簡をた
とむる双方より甲州に攻入んとすむいしハ能
登より歸りし上野通る甲斐より入るはとるし
むいしハ一揆とも一万人ゆり道をせむる雪は
アまうはきて凍死多く一揆のたれは破らる

ほい、飯國——ぬ①十一月信長上洛正三位内大臣に任
まはれ北畠中納言具教卿信長にせまらして実子信意
を——置き信雄の家流きし事をやせしめしむ
かりい内々ハ甲斐の武田と心を合て信長にそむき
んとの結搦者ときこしけしハ信長具教を食たより出
はけて招き鎧武者かくし置て安くと討てしむ年
平九北畠の一族十三人かくし切てきて國司九代の前
葉一時よさそハ亡ひしは信雄の養父なまそハとて信
意をハたせけて長嵩に配流せ②十二月大君惣領の
姫君を奥平信昌に妻せしむ最初市妻 永見殿懐妊し

て市様姫を損ししは玉をうつて姑夫の家より一月
余りして双生を産み一人ハそら玉を産一人の御
名を秋丸とゆき信康むろとせ玉の御をかく
こころし事三とせうぼとありある日大君園崎
に入らせ玉ひしと兼てか——事せ何しり障子引
うさうし父上くとゆきあみを信康君弟のい
を今日見参よ入まはハやと宣ひ秋丸の御を引てま
ま大君やうて市藤の上よかきもくあハ本多重次よ
あけけらるるハ中納言秀康卿に③撰紀州の一揆雜
賀子盾志と和泉の門徒等一味して貝塚に盾籠

リ所ニ此砦を築キ勢ひさくんなり
⑨ 今月七日の夜薩摩の軍勢日向野尻の城に入明きハ八具修理大夫義久野尻子陣とる伊東々兵もしたまうとて戸寄の城へそおちさうぬ其中に家人福永丹波守心うさうしとらまらうしろ矢射る程子伊東祐兵戦い及を去して一族郎等引具して帆北とよ所子山はさし豊後おちゆくりとてきて大友を頼りゆく義久はひ大隅日向を合せ領を今年南蛮の船大石火矢二ツを大友におくら天正五年丁丑正月勝頼北條氏と婚姻をむきふ二月内大臣信長はくう和泉河内の一揆を征伐しあふ貝

塚子籠はく一揆はく近てらりくから信長進みて城ニヶ所攻おとし三月雜賀を攻め張本の者皆降系も信長兼て謙信と一味して甲斐の武田をほろかさんとおひし謙信は北國を打入とて先謙信を亡さんと企能登の住人長九郎左三郎重連をさそひ立て七尾の城子指籠る越中も一味する者多くして合戦あらとらふかふる六月謙信軍を出して越中能登入り重連々一味の者を打破して七月七尾の城をせむ重連弟の僧孝恩を近江はくし信長は事急なり

とほけさせし、城中に心くまの者有て重連を殺し
降余は出に孝恩ハ髪を立て長九郎とて連龍と改
名し前田家よりて武勇の死ありてむし平家の
亡しとき頼朝朝臣長谷部信連々武勇を称して
能登の内所領をむる子孫代々住居して長の一
字を姓とて連龍ハその子孫なり(遠)八月甲斐の大將穴山信
良攻入て遠州山科の陣とる大君ははるし出馬有て
信良の勢を打破りむつてきまて樽井山よりせらるるを
安倍大藏光真戦てお退く(越)謙信進んで加賀より入る一
向賊一揆とる降余しけとて金沢の城をし攻る時

織田の勢七尾の城の後まきせんとして加賀の水島と云
所まきまきしし謙信の勢をまきまき夜の間にあけ
さりぬ謙信進んで越前より織田の番兵をい
も一國主柴田勝家おそめて出さるけとて北國大方平
けて越前の水橋の陣を引き禁制法度を定て飯田
せり(畿)九月松永久秀信長の作を蒙り大坂の城を攻
天王寺の陣おしし忽ち心変して信貴の城より
をい信長子息信忠を討ちの大将として松永
城より向あり細川藤孝明智光秀筒井順慶を先
陣より定えらる先陣の城をせんとし藤孝の子

与一節忠興十五才 舎弟領五節忠昌十四才 兄弟共父
随て十さきうけし二人なりし首取てはひし城を攻めし
ぬ信忠卿をんて信貴の城を攻めしはひし順慶の譜代
相傳の侍一人をしめ順慶の本領をうしるひし時松永
の家ははひし久秀運のきも免しを彼節等を使し
て本願寺は加勢ををふこの使大坂よりゆきして順慶
の陣に來てかくとはく筒井やうて軍兵二百人を引か
くはて大坂の加勢を出立せ夜にまきしを河内の平野の方
つらして彼使と共に信貴の城に入りにける十日の曉
よせよ一同に攻めせしと城中忽ち火起て筒井の軍兵二百

人十人しはひ切てまゐる久秀内外の敵を防ぎしはひし
はひし腹切て死してけり其子久通を生捕て誅し一族
のこゝれ殺して大和國をふとく順慶に死かこ
なをる信忠卿位三位左近衛権中納言に任せし素勝頼又
攻來る 大君虺家よお出ぬいしは甲州の勢戦に及せ
しはひし中最初播磨の赤松義祐義村の子別所長治小寺
政職等毛利浮田の武威さししはひしは押領せし
まゐるをとりけし信長に人質を送りて後立をを小寺
藤兵衛政職は黒田官兵衛孝高を使者として羽柴秀吉
吉をたのむ秀吉黒田を補ふとありしはひし
黒田の時
まで小寺官

兵部と云今筑前
五千二万石

十の官兵部孝高の父を入道宗圓より小寺
の家をたてけて功あり小寺ハ播磨の市着子居城し宗
圓ハ姫路の城子居て小寺の被官より幾ほと多く羽柴秀
吉藤吉郎筑前守に任し播磨の國を治りし孝高父
子に心をきき方人してけり秀吉市着子入部せしとき
小寺改職ハ心あがりして備后より黒田父子秀吉をむ
くおのり居城の姫路を築らせしより秀吉辞退しけ
るをあるよりよきめて姫路子居せしより秀吉孝高を
頼しよりおもしろく軍帥とあをき肉栗半郡を所領し
ありし明年より秀吉姫路の城を改め築く十月信

長從二位右大臣に任じ秀吉黒田孝高を先手として祐用
上月の城を攻む浮田直家後卷の勢を出せしを打ちあつて
けしうを浮田の勢ハとて久て黒田の居城を阿備を攻
む孝高城に入て戦ひ敵を追い退けしより又上月の城
をかき奪ひ返して番の兵おきて引く遠十二月大君
從四位下右近衛権少將に任じり今年植村出羽守栄政率
去三十七才栄政の父栄安ハ天正の末背掛りて討死し三十一才
栄政ハ九才の時より大君駿河よりせめふり供して
より一生の高名教をきき織田殿より一樊噲とせ
し信玄ハ天下武勇の士を評せしより十の

出羽守を以て大剛の兵と稱しけりその子新太郎家
次同しく父祖の名をおとしり慶長四年三十三才に
て死む大君その代々高名の家なるを思ひて家次の子
家改十三才なるを五出さし同十三年叙爵し志摩
守に任し寛永十八年大和国高取二万五千石をむり
今も同し

